

御陣乗太鼓とキリコの鐘



「輪島市名舟。波の音と、御陣乗太鼓の壮大な響き。情熱。燃える想い。狂乱の連打が海に空に広がります。」

かいせつ



輪島市名舟御陣乗太鼓は、7月31日から8月1日にかけて名舟町の氏神白山神社の大祭で演じられる太鼓打ちのことで、その由来は、天正年間に上杉謙信勢が能登に攻め入った際、苦戦を強いられた村人のひとりが一計を案じ、鬼の面や木の皮に目・鼻をつけ、妖気漂う姿で太鼓を打ち鳴らし、夜襲をかけて敵を追い払ったことであると伝えられています。中央に大太鼓を置き、「おきな」「夜叉」「幽霊」などの奇怪な面をつけた男たちが、海藻で作った頭髪を振り乱しながら入れ代わり立ち代わり気合いの入った掛け声とともに太鼓を打ち鳴らします。カシの木のバチからは、ドーンと腹に響く打音が生まれ、初めはゆっくりと、次にやや早く、最後に最も早く打ち切る三段階を何度も繰り返し、一心不乱に太鼓を叩く追真の演舞が続きます。最近では、観光目的に於て、祭りの時期以外にも浜辺の特設舞台などで演じられるようになりました。